新刊紹介

G・マランチュク『S・キヤケゴーァの著作入門』、『S・キヤケゴーァの教會攻擊』

大谷長

デンマーク・ソェーヤン・キヤケゴーァ協會發刊の普及叢書(Populaere Skrifter)の第三册として一九四三年に出版されたマランチュク(Dr. Gregor Malantschuk)著『ソェーヤン・キヤケゴーァの著作入門』(Indførelse i Søren Kierkegaards Forfatterskab)は、多くの批評家によつて、ユニークなものとして、又小入門書としては「最良のもの」(den bedste)として「稀有の重要さを持つもの」(unusually weighty)として、認められている。然し勿論この本に就て多くの批判も述べられたし、注文も擧げられた。だが筆者の見る所、それらの批判は皆、マランチュクが餘りに純な打込み方をしている所から目立たしめられた偏向に對して、なされたものと思う。

マランチュクの說く所は次のような設計になつている。キヤケゴーァは、彼の時代及び來るべき時代が「解體の時期」なる事を洞察した最初の一人であり、そして彼は同時にその精神的沒落から人間を救い得る眞理を見出す事を彼の使命とした。之が、この本の取扱う主題である、從つてそれに應じて、①解體の時期の性格ずけ、諸契機の說明。それに對する救濟眞理をキヤケゴーァが見出そうとした道。②そのような道の展開さるべき場所としての人間存在の三段階。そしてそれに應じ彼の著作活動は「段階的に前進的」である。③眞理傳知としての彼のやり方たる傳知の辯證法。

マランチュクの書は他の多くのキヤケゴーァ研究書と同じく三段階を取扱う、然し例えば Valter Lindström の徹底的な『諸段階の神學』が出ているにも拘らず、マランチュクの書の存在理由は、諸段階に就ての彼の獨自の優れた把握の仕方にある。その着眼が卓越しているので、これ以外の說明は殆んどその光彩を失うと筆者には思われる程だ。

さて、キヤケゴーァはあらゆる人生領域を經巡つての人間觀察、人間認識の結果、彼は最後に、人間生存の動いている法則と道を見出し得たと信じた。人間生存に就てのこの全體觀を、彼は諸段階の理論に綜括するのである。この理論は人間の全ての實存在可能性を含む事を彼は全く確信していたのである。そしてこの諸段階の構造を探究するに當つて考えられる事は、キヤケゴーァがこの理論をば、非常に單純明瞭な前提、卽ち、二つの全く異つた質の綜合としての人間という命題、の上に建てている事である。二つの異つた質、卽ち、時間と永遠、有限なものと無限なもの、肉體―靈魂と精神、必然性と自由、等々である。然しこの書では最も概觀的な一組たる時間的なものと永遠なものが便宜上取上げられる。このように、「二つの全く異つた質の綜合としての人間」という形式の下に、あらゆる人間生存の可能性をキヤケゴーァが持ち來る事によつて、あ

らゆる人間の生存の全體觀と考えられた「諸段階」理論は、この綜合の歴史的な着衣に外ならないのであり、逆に、この二つの異つた質の綜合のあらゆる可能性を反省する事によつて、諸段階の構造の洞察を得る事となるのである。

二つの異つた質の内、一方の側が價値の上で一層高く、指導的であるのは明かであり、そして人間はこの兩側をその正しい仕方で結合するという課題を持つている。この書で特に主徵表とされた時間的なものと永遠なものに就て言えば、人間の内の時間的なものを追求する意欲が如何に削減されて行つて、永遠なものの契機が次第に支配的となるかが、審美的、倫理的、宗教的、の諸段階を通じて、多くの卓見と創意を以て示されるのである。ここではその全てを盡す事は出來ないから、審美的段階に就てのマランチュクの説明の要旨だけを取つてその創見を見る事にする。

審美的段階の説明に當つてマランチュクは、不安の概念で始める。不安とは、或る一定の有限なものへ「反省する」恐怖と同じではなくて、不安は、人間が自らの内に永遠という要素を持つている事を表わす。人間の内のこの永遠の契機なしには不安はあり得ない。永遠の契機を含むこの根源的狀態には、同時に、永遠なものに從う事をやめ得る可能性も含まれている。かくして人間は時間的なものを追い求めるが、永遠なものを全く棄てる事は決してない。次で色々の形の不安が述べられるが、それらに於て、その對象として「無」(Intet) という形で現れているものが、永遠なものだが、そのような段階（本質的には異教的象面）が審美的立場である。さて、永遠なものが無としてではなしに、「人間への倫理的要求の形」で現れた後に於ては、審美的なものはその性格を變える—之は世界史の中で二つの點に於て起る、卽ち、異教國民に於てはソクラテス、ユダヤ國民に於てはヨブとアブラハムに於てである。永遠なものはソクラテスに於ては「絕對善のイデー」という形で現れたが、それは、イロニの世界洞察によつて審美的なものが重要でないもの (det Ligegyldige) に引下げられたからである。ヨブとアブラハムに於ける諦念と犧牲は、ソクラテスに於けるイロニと同じ役割をなして、時間的なものよりも一層高いものの存在を示し、彼等に於て審美的なものの意義は、それ（審美的なもの）が神の意志の實現される場所だという事にある。キリスト教（或はキリストの事實）によつて初めて、あらゆる存在關係に根本的に新たな照明が投ぜられる。それによつて時間的なものそしてそれと共に審美的なものが全性格を變える。精神的原理としてのキリスト教と審美的なものの間には、絕對的矛盾關係が提立される。ここに審美的なものは、精神の要求に從屬するか、獨自の王國として弧立して精神に反抗するか、どちらかとなる。審美的なものに對するこの新たな形式を、キャケゴーァは『これか—あれか』に於て、そして更に『人生行路の諸段階』に於て取扱う、としてマランチュクはこの兩者の各章にかなり詳しくついて行く。然しその顯著な二三の要點だけを述べるならば、キリスト教が人間に眞理を明示した後に、審美的なものの内に留まり、そこで自己主張する事は、人間を絕望に導く。

右の二書はこのような絶望に到る審美的なものの多様な形式を述べるが、『ディアプサルマタ』は永遠なものを有限化する(そしてそれによつて價値の平盤化を準備する)「絶望的喜び」の氣分の表現であり、性的なもの(又は det erotiske)は、人間が時間的なものに結びつけられている事が最も強く現れている審美的なものの領域であり、この領域の代表者はドン・ファンである。ドン・ファンの出現は、キリスト教の來た後に於てのみ可能であつた、ドン・ファンに於て表現されているような感能の見方は、キリスト教以前には見られなかつたものである。「最も不幸な者」の章に於て、審美的なものがその否定性に於て、つまり不幸なものとして把握されることによつて、審美的なものの空虛さの洞察が發出せんとしている。陪席判事ヴィルヘルムが審美的なものに就て述べる所は、審美的なものと時間的なものが合致するという、これまで表明されて來た假定を充分に證するものである(ヴィルヘルム自身が倫理的段階の後の階段を示す事は、「倫理的段階」の章で述べられる)。『これか—あれか』の審美的立場に共通の事は、この時間的世界によつて何らかの意味で制約されている悦樂をば最高の目標として提立した、という事である、これらの立場は、倫理的側面から見れば、永遠なものに缺けているから、「絶望」なのである。然し『これか—あれか』の審美的諸段階には、絶望から自らを引放して、永遠なものを選ぶ可能性がまだ存していた、然し、『人生行路の諸段階』に於ては、徹底された審美的立場が集められている、卽ち、男性が永遠なものを否定し、「時間性の眼で見た」時の女性に對する見方を、それらの者は代表している。かくして人が、永遠なものと接觸する事を拒否する程に時間的なものに固執する時、デモニスクなもの(det dæmoniske)が生ずる。デモニスクな人間は、自らが虛僞(非眞理)の中に生存している事を永遠なものが思い出させるのを不安がる。そして時間的なものに閉じ籠もる。デモニスクなものは審美的なものの極端な形成である、それは「永遠性を眞面目に考えようとせず、あらゆる言い拔け思いを附く」のである。審美的なものの限界としてのデモニスクなものという規定によつて、キャケゴーァは人間靈魂の最深最暗の窪みに達した。

かくして審美的段階から倫理的段階に移り行くのだが、キャケゴーァに於ける「倫理的段階」の意味は、①永遠なものがその要求を伴つて人間に現れたという事②この要求を時間的なものに於て實現出來る可能性を人間が信ずるという事③神及びその實在の思想を倫理的なものが指示するという事、であるとマランチュクはなし、倫理的立場を通じて(審美的「段階」Stadium にも多くの階段Trin があつた如く、倫理的段階にも多くの階段がある)人の學ぶ事は、人間は自らの力によつて如何になす所が少いかという事、又、人間生存の本來の目標はどこにあるかを見出すという事である、とする。

けれども、もはや私はここでこの書の紹介の一端を打切るために、更に簡單な要約を附加える事にせざるを得ない。マランチュクは倫理的段階の諸階段を通じて、「主體性—眞理」なぞに就ての立派な見識を示しつつ、最後にヴィルヘルムを取來

つてヴィルヘルムが彼の代表する段階から一層高い段階への正しい移行が、如何なる狀況の下に行われるかを吟味するさまを述べ、宗教的なものに關わる者を待つている「恐ろしさ」と苦惱をヴィルヘルムが眞面目に語る點に注意を換起する。ヴィルヘルムが永遠なものを時間的なものの内に實現する課題を試みる内に、人間的努力の不充分さを洞察し、人間實存在の目標は、可視的世界の限界を越えて存立している事を知る。この洞察によつて人間の精神的發展の重點は、人間から神に移る。このような叙述を以てマランチュクは「宗教的段階」の章を初め、そして、ここでも又、宗教的段階に多くの階段がある事が述べられ、キャケゴーァの宗教的著作を通じて宗教的道程の遍歷が示される。その間、マランチュクは、キャケゴーァが恩寵に就て語る事の少いのを人々によつて屢々責められる事に對して、ルッター教會諸國に於て恩寵の一方的な强調のために、却つてそのキリスト教的眞理性が意味を失わんとする危險、或は、恩寵の誤用、に對してキャケゴーァが警告したものである事を指摘し、又、『愛の業』に於て、自己否定の道によつて具體的生存のあらゆる困難を解決するようキャケゴーァによつて勸告されたほんの數ケ月後に、他の側から、社會的問題を强制的な道によつて解くべき希求（一八四八年二月の共產黨宣言）が發せられたのは奇なる事であり、世のあらゆる窮乏を除く事が出來ても、人間が神から放されるという代償によるなら、又、永遠なものを忘れるのなら、それはあらゆる他の悲慘よりももつと大きな悲慘である事を、キャケゴーァは正しくこの書『愛の業』で說いているものなるを彼は强調する。「『金をよこせ、病院を建てよ、それが一番肝心だ！』否、一番肝心なのは愛憐だ、と永遠な心は言う。」(S. V. IX 371).

かくの如くにして、宗教的段階に於て、永遠なものの要素が漸次高潮して强調されて行き、倫理的—宗教的なもの（或はキリスト教的なもの）の要求の最高點が達せられる、卽ち殉教はキリスト教的過程の最高階段である。キャケゴーァは價値の解體のための格闘で始めたが、今やキリスト教殉教が最高位に立つ價値順序を提立する。殉教によつて、時間的なものと永遠なものの綜合の最後の階段が達せられたのである。この階段で、人は時間的願望を引下げて、全く神の道具（Redskab）となるのである。キャケゴーァが、キリスト教に對する最高の形式を戰闘的原始教會に見出してより、彼は之を準則として用い、全視線を彼の同時代に向け、戰闘的教會とミュンスター監督によつて代表される當時の教會のあり方の間の裂け目に注目させようとした。時恰かも彼に取つて宿命的恩義のあるミュンスター監督が死し、後繼者たるマルテンセン教授によつて、正しくキャケゴーァ自身の用語たる「眞理の證人」が、ミュンスターに轉用されたのを合圖として、彼の激烈な教會攻擊が爆發する。マランチュクは「宗教的段階」の章の終りの所でこう書いた、「最後の教會攻擊なくしては、新たなる決定的視點が持出さるべき時に、なければならぬ顯きの要素が、キャケゴーァの著作家活動には缺ける事になるだろう。攻擊は彼の著作家活動に於ける画龍點睛（Prikken over Iet）だ。」と。マランチュク以外

の誰がこのような卓見を述べた者があるか！　キャケゴーァの「攻擊」の內面的な意味がここに明かにされたという感じを持つのは、筆者だけだろうか。キャケゴーァの「攻擊」は正しく偉大な顚物である。Og se! マランチュクが一番批判されているのは、このような意見を書いた事に對してである！

我々はマランチュクの「攻擊」に就ての考えを更に詳しく知りたい意欲に驅られる。そして、幸いなる哉、『ソェーヤン・キャケゴーァの敎會鬪爭』(Søren Kierkegaards Kamp mod Kirken) なる一書が、同じくデンマーク・ソェーヤン・キャケゴーァ協會の普及叢書第六册として昨年發刊され、マランチュクと Professor N. H. Soe の兩者の論文が收められている。マランチュクの論文は『ソエーヤン・キャケゴーァの敎會攻擊』(Søren Kierkegaards Angreb paa Kirken) である。私はマランチュクのこの論文に就て自分の考えを述べる前に、先づこの論文に附從いつつその紹介に努めたいと思う。

キャケゴーァの敎會攻擊は、普通一般に考えられるような、一人の病人によつてなされたものとするなら、攻擊の激烈さは得心の行くものとなるかもしれないが、然し、それは、彼の著作家活動の正しくこの時期が我々に與え得るあらゆる廣汎な敎示を切り棄ててしまう事になり、彼の全著作家活動を被つている全體的理念を理解する事を妨げられる事になる、とマランチュクは最初に述べる。之は彼の前著を貫いていた思想であるが、ここでは特に、キャケゴーァの敎會攻擊の問題は、彼のその他の著作家活動と密接に結びつけてのみ解かれ得るのだから、彼を最後に敎會攻擊へ導いた諸要素と道程を明かにする必要があるという事が强調され、それによつて、マランチュクは三つの順序を踏んで論を進めるのである。卽ち、①キャケゴーァが既存物に對して論攻的態度を持するに到る最初の諸原因を擧げ、②次で、この論攻的態度が如何にして敎會との大衝突へ發展するかを示し、③最後に、敎會鬪爭自體を觀察しようとするのである。

先づ第一の點たる、キャケゴーァの早い時期に既に彼を論爭的たらしめ、そして最後の敎會攻擊に於ては既存物（あらゆる制度慣習を含めての國敎會）に對して準據として彼が用いるに到る最も嚴格なキリスト敎へ彼を導く所の要素として、マランチュクは二つを擧げる。それは、彼が父親から得た嚴格なキリスト敎的敎育と、彼自ら「肉の內なる刺」と名ずける彼の肉體的—靈魂的苦惱、である。キャケゴーァ自身が後に言う如く、この「氣狂いじみた敎育」がどこに存していたかを、我々は決して完全に明瞭にする事が出來ないと同樣、もう一つの要素たる「刺」の苦惱の方も、やはりそれがどんな種類のものかを、我々が決して具體的に知り得ない點で軌を一にしているのは奇とすべきだが、刺に就て我々が具體的に通じて居らずとも、如何なる役割をそれがキャケゴーァの生涯に於て演じたかを我々が知りさえするなら、それは我々に取つて重要な事ではないし、又その演じた役割の事は、キャケゴーァの言葉から我々は充分すぎる程知つている、とマランチュクは述べて、この刺の苦惱が嚴格な敎育の要素と共に、キャケゴーァにあつて、苦難

と殉教が主導的となるキリスト教、殉教のキリスト教、或はキヤケゴーァの呼ぶ如く「眞のキリスト教」の方向へ、如何にして導いて行くかが、次に示されるのである。

右の二つの要素が、殉教のキリスト教へと彼をして注意せしめるように手助けするのでなかつたならば、この眞のキリスト教に眼を注ぐ事は容易な事ではなかつた、とキヤケゴーァ自身言つている。かくしてキヤケゴーァは、山の上で支配しているのとは別箇のキリスト教觀へと教育される事になるのである。もしもキヤケゴーァのこの元來からの論爭的側面を考慮せずしては、彼の初期の著作にある論爭的な多くの文章命題が理解されない、これらの命題は、それを徹底させるだけで、後年の、既存物に取つての危險な武器に用いる事が出來たのである、とマランチュクはなして、この事情を『畏れと戰き』、『受取り直し』、「日誌」、「建德的談話」なぞからの、彼の蘊蓄を示す諸例によつて、マランチュクは示すのである。

我々がキヤケゴーァの日誌に於て出會う最も屢々のそして最も深刻な反省は、彼自身がどこまで遠く乘り出すべきかという事と、彼が「重裝備」と呼ぶ所の、嚴格な教育と「肉の內の刺」によつて刻印されたキリスト教が彼だけに特別なものかどうか、という事である。前者に關しては、キリスト教の最高階段たる殉教のキリスト教は、彼自身はその生涯に於て實現出來ない理想であり（彼は嚴密な意味で眞理の證人と呼ばれるには餘りに詩人であり）、その下に自らを卑うしなければならぬものという確信に達する。後者に關しては、その重裝備は全ての者に妥當するという結論に達する、全ての眞のキリスト者は終局的にはこの世に於て受苦するに到るという事をキヤケゴーァは洞見するからである。そしてキリスト教のこの最終階段に益々彼が意を用いる過程は、日誌に跡ずける事が出來るが、殉教を準則として彼の時代に適用する度合いに應じて、牧師に對する彼の言表は益々鋭くなる。特にミュンスターに關しては、キリスト教をその眞の形に於て再提出しようとする彼の鬪爭に於て、彼のミュンスターとの關係は特別な一章をなす。ここでもマランチュクはずつと後に戻つて、既に一八四三年に彼がミュンスター批判をなしている事から初め、ミュンスターを同盟員として獲得する淡い希望とその困難、ミュンスターの代表するキリスト教がキリスト教ではなくてその緩和であるという事をミュンスター自身が容認する期待、そしてそのためには、ミュンスターがその著書でキヤケゴーァを犧牲にしてゴルスメットを持ち上げている事にも耐え、ミュンスターが死の瞬間に死にながらでも右の容認をするかもしれぬという配慮から、最後までその餘地が開けられておかれねばならなかつたのであり、その故にこそ、ミュンスターは決して攻擊されてはならなかつたのだ。

今や一八五四年一月卅日に、ミュンスターは右の容認をなさずに死んだ。もはや事態は「一咬み」を待つだけだつた。そしてその機會が與えられた。マルテンセン教授の追悼講演がそれであり、その中でミュンスター監督を「眞理の證人」と呼んだ事がそれである。

これによつて我々は、教會鬪爭そのものを述べる段階に達したのである。この教會鬪爭の間に書かれた著作は、誤りなく見られた場合、四つの區分から成る、とマランチュクはする。即ち、第一の部分は、キャケゴーァの抗議及び教會の側から容認が擧げられはすまいかという彼の最後の期待、第二の部分は、『瞬間』による攻擊そのものである、だが『瞬間』第二號の後、第三の部分をなすものとして、『公的キリスト教に就てキリストは如何に審判し給うか』という標題の一小編をキャケゴーァは送る、之は、力の衰えた教會の有樣の責任を問う時にはキリストも又その發言に於て穏和ではなかつた事を示してキリストを引合いに出すのである。第四の部分として、我々は『瞬間』第七號の後に、『神の不變性』という一つの「談話」を持つ、之は、この壞滅的な鬪爭の中にあつて、全てのものが滅びた時になお存立している積極的なものを指示せんためである。

マランチュクはこの四つの區分の各々にわたつて詳細にその諸契機を摘出提示して行くのだが、ここでは單にその目立つたものの若干を拾い集めるに止めざるを得ない。

さてキャケゴーァがミュンスターからの認容を忍耐に忍耐を重ねて待つた如く、ここでも彼は教會の側からの認容を待ちに待つのである。彼が既に武器を構えて用意が出來ている時でも、これが最後であるが如くに教會の代表者達の責任を問うて語りかけるのであつて、その事は同樣に、『瞬間』が現れた時ですらもなお、この容認をなす可能性を彼は閉め出してしまつてはいないのである。又彼は容認を爲しやすくするために、自分自身をも斷罪の下に引入れると共に、自分のなす如き業は自ら見出したものではなくて、攝理の恐るべき强制である事を思うのである。

キャケゴーァは教會鬪爭の最初の位相にあつては、彼の視點を全ての者が知り得る事を確かにするために、「政治的な行きわたつた新聞」即ち「祖國」紙を用いた。だが今や「瞬間の來た時」、この教會鬪爭の第二の位相にあつては、「決定的な事が全く決定的に」言われねばならなかつたのである。かくして豫約制のパンフレット『瞬間』による攻擊が開始される。今や、皮肉、諧謔、諷刺、斷罪、笑いものにする事、等々の破壞的要素が口を開く事によつて、空洞になつているとキャケゴーァの考える現實を全面的に壞滅せしめ、我々の全ての至聖所、傳習的理解と實踐、を顚倒せしめ、全ての事、絶對的に全ての人間的な事を、罪の下に置くのである。世の全てが惡しきの内にあるというキリスト教的形式が、恐るべき徹底さを以て、生存の多樣な諸關係に適用されるのである。

キャケゴーァが彼の攻擊戰術を完全に展開する前に、つまり、『瞬間』第二號の發刊後、彼は一著作に避難する、ここで彼はマタイ傳二三、二九―三三及びルカ傳一一・四七―四八の學者ファリサイ人へのキリストの峻嚴な審判を引くが、之によつてキャケゴーァの强調しようとする所は、彼が攻擊を行うのは新約聖書を手にしてだという事、彼は教會への襲擊にキリストを味方にしているという事、である。

キャケゴーァは『瞬間』第三號以下によつて、教會への鬪爭

を續けるが、その間、キリスト教のあらゆる歴史的現象形態には觸れない。彼はルッター主義にもカトリシズムにも觸れないが、それは、世に對する極度の論難的態度を伴つた原始キリスト教に達せんがためである。然し乍ら、彼は又、例えば聖靈降臨節に三千人がキリスト教に回心する性急さを批判するにさえ到る。同様に、使徒パウロの、人間的本性への順應が批判に露される。キヤケゴーァは、準則に極端な絶對性を持たすために、最後にはキリストただ獨りのもとにだけ立ち止まろうとするかのように見える、そしてキリストからして彼は、恩寵に意味を與える事となる絶對的な要求を、學ぼうとするかの如くである。かくして彼は、彼の考えるような空洞となつた諳形式、卽ち、現にある形の洗禮、聖餐式、堅信禮、婚姻、を攻擊する事になる。キヤケゴーァはここでは、結着の所、全人間生存は罪あるものという思想によつて作業しているのである。教會闘爭の間に、人間の基本的秩序に就て彼のなす言表は、全く否定的であり、それの最も鋭く行われたのは、子供をもうける事と性的な事物に對してであつた。

だが、キヤケゴーァが正當に全てのものを火に投げ入れ得るのは、彼自身がそう考える如く、返り歸すべき積極的なものがある場合にのみであつた。卽ち、キヤケゴーァは、彼が全てを轉覆し、全てを推し流した後に、あらゆる積極的なものの端初と基礎である思想、卽ち「神の不變性」という思想を以て立現れるのであるという事を、强調するのが忘れられてはならない。彼がこの事を述べるのは、『瞬間』第七號の後である。キヤケゴーァは、舊いものの擊滅が底に達したと彼が考えた場所で、全てがぐらつく時に堅固に立つている力を指示する事によつて、新たなる出發點を與えようとしたのであり、神の不變性の思想は、諸價値が全て地に降ちた時に、ただ一つ新たに積極的なものの出發點を與え得るものであつた。然しそれは又同時に、彼自身のアルキメデスの一點でもあつた。彼がその全著作活動を初めたのは、確固としたその一點を見出さんとしてであつたが、神の不變性に對する「畏れと戰き」の强調を以て、今や彼の著作家活動は終結せんとする。

この時期の彼の日誌に於ける武器庫を通讀する事によつて、我々の見得る事は、キヤケゴーァは彼の教會攻擊に於て、積極的契機を插入するまでに、全ての本質的な攻擊論據を使い盡しているという事である。『瞬間』第八號以後に於ても、若干の鋭い皮肉な突擊は見られるけれども、概してそこには多くの教示的な積極的な諳契機が初まつている。キヤケゴーァは『神の不變性』の談話の後には、『瞬間』の僅か二つの號しか出版しなかつた。第十號は出版の用意が既に出來ていたとはいえ、キヤケゴーァは彼の希望しただけの『瞬間』は既に發行したと考えていたのだつた。マランチュクの理解する所によれば—そしてそれは筆者の同意をも獲得するものだが—たとい死が、攻擊を續ける事を彼に妨げなかつたとしても、ともかく何れにしても彼は教會攻擊を終結しようとしていたと思われる。『瞬間』の最後の號によつて、キヤケゴーァは彼の批判をすつかり盡したのだつた。彼はこれによつて、彼の一生の仕事の最も困難な

部分を完遂し、そして、「決定的な事を全く決定的に」言い得たのだつた。

マランチュクはこのあとに、キャケゴーァの教會闘爭に關して、なお、示唆に富む若干の個々の考察を附け加えている。その中で、教會闘爭での極度に攻撃的憤激的な因子は、「自らを嫌わしいものにする」彼の傅知術と關連する事を指摘しているのは、これ又卓見であり、婚姻に就てのキャケゴーァの攻撃と性的なものに就ての彼の冷笑的な論議に關しては、マランチュクはその師ガイスマールの包括的な理解の仕方を擧げて、全面的に推奬しているが、キャケゴーァが彼の事業の意義を確信していた事に關しては、一八五五年中頃の日誌を引いて、「私が奉仕する名譽を有するこの事柄は、デンマークが嘗て有した最大のものである、それはキリスト教の將來である、そしてそれはここで初まるべきなのである。この事柄は、當然な事ながら、私の方からは、デンマークがこの點に關してはそれに匹敵するようなものを持たないようなやり方で、熱意と努力と勤勉と無私で、取扱われているのである。」とキャケゴーァがなすのは、彼の事業特にその教會攻撃の深い意味が、キリスト教眞理に對する尊敬を再創造し、個人をしてキリスト教理想からの距離を容認するよう手助けする事にあり、この距離の容認が、キャケゴーァによればキリスト教界にとつて進歩と刷新を意味するである、とマランチュクは述べて彼の論文を結んでいる。

以上が、キャケゴーァの教會攻撃に就てマランチュクが說く所である。然し我々がここで考えて置くべき事は、キャケゴーァの教會批判を眞正面から取上げようとする事は、たといそれがキャケゴーァの解說であるという形であつても、問題が人間の根源的立場としての宗教的態度に關わるが故に、解說者自身の立脚地がどうしても現れるのだから、(そしてキャケゴーァの場合はその著作活動の示す傅知術の機構から、彼の著作によつて心底的に觸れられる事なしにそれをすり拔ける事は出來ない—もし彼の著作が讀まるべきように讀まれるなら—のだから)、それはそのまま直ちに今日一九五七年のデンマーク・キリスト教界と對決する事を結果するという事である。そしてそれがどんな影響を個人に對して持つて來るかは、實際に今日のデンマークの教界事情を微細に知り、錯綜葛藤しているその内部事情と雰圍氣に觸れた者でなければ、その困難さの實感は到底分るものではない。ここにマランチュクの身を以ての、或は生存を賭けての發言が見過ごされてはならないのである。(この事情は、マランチュクの論文と丁度合本になつているN. H. Soeの論文を合せ讀む時、一層それがはつきり分る—以下にそれに言及する)。又同樣に、キャケゴーァの當時の情況にしても、Hal Kochやその他の碩學による當時の教會史的叙述の部厚い頁にたとい眼を通したとしても、時差はあつてもデンマークの現實の教界感覺なしでは、我々がキャケゴーァの教會攻撃文書から得來るものは、高々、謂わばその興味本位な側面でしかないという事は、外部の我々の忘れてはならない所である。殊に現地での聖職者、教職者の側に於けるそれ相應に正當な主張と、キャケゴーァに對する根强い支配的な反感は、ここが對岸

ではなくて火事場である事から寧ろ當然であり、外部で膨れ上つたキャケゴーァ崇拜が、ここでは單なるエピソードに過ぎない事は屢々である。

今、前述のソェの論文（N. H. Soe: Søren Kierkegaard og kirkekampen）を見るならば、このデンマークの今日の代表的な聖書學者にして組織神學の教授であり、デンマーク・キャケゴーァ協會の會長でもある人の述べる所は、キャケゴーァの最後の教會攻擊に對する苛責する所のない徹底的な否定的論述である（デンマークではキャケゴーァに就て書く者が全て彼に好意を以てするとは限らない。例えばデンマークの代表的な國民高等學校 Askov Hojskole の學長 Knud Hansen のキャケゴーァに就ての大部な著述は、グロントヴィの立場から彼を批判し、打擊を加えるために書かれたものである）。そして、以前の時期のキャケゴーァと教會闘爭のキャケゴーァの違いが强調されるのは、マランチュクの理解の主調とは全く逆である。ソェによれば、キャケゴーァが教會攻擊の時期に用いているのは、殆んど俗惡下品な調子であるのみならず、彼の立脚地の動機となつているのは、明かに透いて見える殆んど病理學的なものの特質である。そしてソェは、キャケゴーァの新約聖書上のキリスト教解釋を疑わしいものとなし、キャケゴーァに對してその「全く恐るべき」聖書利用を非難して、「ここでは重要な諸點で新約聖書とは違つた聲が語つている」とすると共に、キャケゴーァの婚姻觀に對しては、キャケゴーァの精神中の病患が今や妨げられる所なく擴がつている事の爭うべからざる證明であるとする。キャケゴーァが「職業牧師」に鋭い攻擊を浴びせた時、彼は如何に多くの國教會牧師が逆境に惱んでいるかを忘れていたし、ともかく彼は自らそれらしいものを決してやつて見ようとはしなかつた、とソェは言う。そして、マルテンセンへの彼の襲擊は、順風に棹さすのとは正反對の結果になつた優れた才能の持主が、今や、榮達をした者に立腹してつらく當るものだ、と說明されるのである。このようにソェは、マランチュクに於けるのとは逆に、キャケゴーァの教會攻擊と彼の爾餘の著作活動の間に何らかの連關を見るのではなくて、彼の結論は、「私の眼を以て見れば、もし彼が一年乃至二年早く死んでいたなら、キャケゴーァはデンマークの精神生活の中でもつと强力な地歩を占めていただろう。」というのである。

「ソェーヤン・キャケゴーァの教會攻擊は、非常に困難な題目である。」というのは、マランチュクの論文の書き出しの言葉である。彼がどんな感慨を以て之を言つたかが今分るような氣がする。時代が正しく絶望する時に人は私を理解するだろう、とキャケゴーァは言つたが、マランチェクは嘗てこの言葉を引用して語つた事があつた。マランチュクは、そのような正しい絶望が自分を踏みつけて越えて行くのを、覺悟しているように見える。

（本稿は、もと「G・マランチュク、その人と作品」と題して書かれたものを、短縮の必要上前半を削除する事によって生じたものである。從ってこの重要な學者を一般的に紹介する事も不可能であった。マランチュクは右のほか、キャケゴー

アに於ける、「肉の内の刺」、「自由の辯證法」、「飛躍」、「眞理と現實性」、「重複」、「キリスト教的なものの變形」等に就ての多くの論文を發表している)。(筆者　大阪外國語大學〔哲學〕教授)

彙　報

京都大學文學部哲學科卒業論文題目

――昭和三十三年三月――

哲學專攻

學士　大林　信治　思惟と詩作(Heidegger 哲學の一考察)
　　溝口　兢一　人間存在の有限性について
修士　鯵坂　眞　カントの歴史觀をめぐって
　　竹市　明弘　存在と頽落
　　長橋　壯　A. N. Whitehead's Method of Extensive Abstraction

西洋哲學史專攻

學士　田中　治男　精神現象學に於ける近代社會觀
　　辻　通男　プラトンの「パイドン」をめぐって
　　津村　寛二　プラトンに於けるヒュポテシスの方法について
修士　田伏　正義　スピノザ哲學における自由について
　　塚崎　智　カントにおける自然と倫理の間

　　長坂　公一　プロタゴラスの人間尺度說――プラトンの「テアイテトス」第一部を理解するために――
　　布村　忠雄　カント空間論――數學的側面――
　　三嶋　唯義　單純性と眞理――デカルトとマルブランシュ――

印度哲學史專攻

修士　十文字文丸　ヨーガに於ける潛在意識の問題

支那哲學史專攻

學士　石倉　尙江　禮記に於ける禮の思想
修士　水原　渭江　殷虛卜辭及び金文並びに後時史料より見たる殷周王朝の音樂的變遷

心理學專攻

學士　青野貴美子　言語系列學習における分配學習法の問題
　　岩瀨　慶孝　リーダーの型と子供の行動について
　　鬼丸　正巳　圖形殘效の測定における檢査圖形の提示條件について
　　栗田　清　社會心理學におけるコムュニケーションについての研究
　　小牧　純爾　白鼠に依る明暗辨別における過剩學習の問題
　　佐々木土師二　時程纖時比較における時間順位誤差について